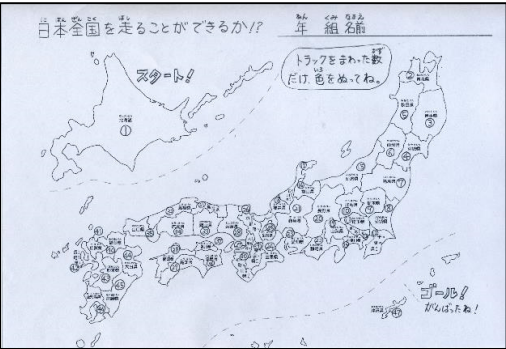


令和2年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」 事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 茨城県 】

学校名【 潮来市立牛堀小学校 】

1 実践テーマ	Ⅲ・Ⅴ
2 実施対象者 (学年・人数)	3～6学年 151人 (3学年 41名、4学年 39名、5学年 38名、6学年 33名)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (体育) ② 行事名 (オリンピック・パラリンピック教育講演会) ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	・けがをしてからパラリンピック出場に結び付いた経緯を中心に講師の生き方に触れ、児童一人一人が自己の生き方について考える。 ・パラリンピックや障害者スポーツへの理解を深めるとともに、児童の生涯にわたっての豊かなスポーツライフへの興味、関心を高める。
5 取組内容	1 事前活動 記録に挑戦！「持久走」 (1) 11月の毎週水、金曜日の中休みの時間に、業間運動として校庭のトラックを走り、周回した数だけ茨城県地図の市町村、または日本地図の都道府県を塗りつぶしていった。   2 オリンピック・パラリンピック教育講演会 講師：飯島寿一さん（鉾田市出身） シドニーパラリンピックのアーチェリー競技 団体4位入賞 (1) 【第1部】講演会（3～6年生が参加） テーマ「障害と共に歩んだアーチェリー」 飯島氏からは、けがをして車いす生活となった経緯、リハビリセンターでアーチェリーと出会ったきっかけ、いろいろなスポーツ大会で優

勝するなど活躍を続けた後、2000年のシドニーパラリンピックに出場し、国の代表として出場することの素晴らしさなどを話していただいた。「幸せか不幸かは自分の心が決める。今、幸せかどうか聞かれたら『不便はあるが幸せ』と答える。」という言葉で講演を閉めた。



(2) 【第2部】体験活動（5、6年生が参加）

5、6年生を対象に、アーチェリー体験を行った。飯島氏から弓の使い方や矢が飛んでいくしくみなどを説明していただいた後、児童は、飯島氏が実際に使用していた弓を引いたり、矢に触ったりするなどの体験をした。



潮来市堀之内の市立牛堀小（大崎一寿校長）で25日、県五輪・パラ五輪教育推進事業の「教育講演会」が開かれ、アーチェリーでシドニーパラ五輪に出場した飯島寿一さん（75）が「障害とともに歩んだアーチェリー」と題して「体に障害はあっても、心の障害はなくて暮らしていきたい」などと語った。講演後には、児童のアーチェリー体験も行われた。

飯島寿一さんが見守る中、アーチェリーの弓を引く体験をする児童ら＝潮来市堀之内

潮来児童、アーチェリー体験も

講演後、5、6年生を対象にアーチェリー体験が行われ、児童らは弓を引いたり矢に触ったりしていた。実際に引いた中田大君（12）は、「弓は思ったより重くて、引くのも大変。飯島さんは、あんな弓を引けてすごいと思う。パラ五輪では、アーチェリーにも注目してほしい」と話していた。（石川孝明）

飯島市出身の飯島さんは38歳の時、木の枝の伐採作業中に転落し、脊椎損傷で車椅子生活となった。その後、県立リハビリセンターでアーチェリーと出会い、1987年の全国障害者スポーツ大会で優勝するまで、しつかりやることで、さばる中に行く、けがをしながら初めて夢中になった。このめり込んだ。1987年の全国障害者スポーツ大会で優勝するまで、しつかりやることで、さばる中に行く、けがをしながら初めて夢中になった。このめり込んだ。

「心の障害なくしたい」
ハラ出場・飯島さん講演

と、その後も活躍を続け、2000年のシドニーパラ五輪に出場、団体4位入賞の成績を収めた。13年に現役を引退し、現在は県アーチェリー協会の理事長などを務めている。

講演では、自身の経歴を振り返りながら「リハビリセンターで出会った障害者の方が、あんなに生きていく姿を見て、（絶望していた）自分の心を変えてくれた。一歩の言葉を聞いて、パラ五輪の舞台に立つた時は思わず目頭が熱くなった。一歩の紹介で、最後に幸せか不幸かは自分の心が決める。今、幸せかどうかを聞かれたら『不便はあるが幸せ』と答える」と明かした。

3 事後活動

記録に挑戦！「持久跳び」

(1) 1月の体育「体づくり運動」の時間に、なわとびの持久跳びを実施した。1学年は1分、6学年は6分というように、「1分×学年」の

	時間を跳び続けることができるか挑戦した。2月上旬に持久跳び大会を実施し、記録達成できた児童を表彰した。
6 主な成果	(1) 主な成果 ・オリンピック・パラリンピックに興味をもったり、選手を応援したいと思ったりするきっかけとなった。 ・講演者を見習い、最後まであきらめずに将来の夢に向かって取り組むこと、自分ができることを行っていくことなどの気持ちが芽生えた。 ・障害がある方に平等に接したり、手助けしたりしたいという気持ちが高まった。 (2) 児童の感想 ・「私が同じような経験をしたら、飯島さんがアーチェリーを見つけたように、私も何か自分にできることを見つけたいと思う。」 ・「将来僕もオリンピックに出て金メダルを取れるようになりたいという気持ちで今を努力して頑張りたいと思う。」 ・「これからも、いろいろとつらい思いもしているかもしれないパラリンピアンの方を、今まで以上に応援したいと思った。」
7 実践において工夫した点 (事業の特色)	・コロナ禍の中なので、近隣市町村にオリンピックやパラリンピックに出場した経験の方がいるか検討した。近隣の銚田市出身の選手に講演を依頼することで、身近にもオリンピックやパラリンピックで活躍している人がいることを知り、オリンピック・パラリンピックが身近なものであると思えるようにした。 ・シドニーパラリンピックで実際に使用した横断幕や日の丸（地元住民が応援メッセージを入れたもの）を展示することで、たくさんの人の思いも背負って大会に出場したということを視覚的に感じてもらえるようにした。
8 主な課題等	・コロナ禍のため、事前・事後活動としてソーシャルディスタンスを保つことができる活動のみとなってしまった。 ・コロナ禍のため全校児童では行えず、3～6年生が参加の講演となってしまった。また、体験活動も人数の関係で5、6年のみとなってしまった。
9 来年度以降の実施予定	・例年、陸上女子100メートル障害の元日本記録保持者、大朝尚子さんを招いて陸上競技の授業を各学年で行っている。ハードルの跳び方やこつ、他の競技のこつなどを教わるなど、トップアスリートのスピードを間近に体感させていきたい。 ・「I'm POSSIBLE」などを活用し、オリンピック・パラリンピックの魅力や価値を児童に伝えていきたい。